

江州示送云、今日可向若州八条、聊為儲饌也、予答云、可随命

裏歌合」に、左の歌人として参加しているが、次の一首が大江匡房の「いかなれば春来るからにうぐひすのおれが名をば人に告ぐらむ」と合わされて持となっている。

年をへて聞けどあかねはわが宿の花に木づたふうぐひすの声

このことについて順徳院は、『八雲御抄』巻三で、「政長、わがやどの花に木づたふとよめり。彼は歌人ならぬど被撰入畢」と述べ、「悦目抄」にも、「かれはさせる歌人ならぬど選び入れらる」とある。たしかに政長は、兄の師賢と違って勅撰集の入集歌もなく、歌人とは称しがたいようである。経信の家集に、当然あつていい政長との贈答歌が、まったく見あたらないのも、その辺の事情に起因しているのであろう。

しかし、『新拾遺集』巻二十に、経信の次の長歌が収められている。

源政長朝臣の家にて、人々長歌よみけるに、初冬述懐といへる心を詠める

あらたまの 年くれゆきて ちはやぶる 神無月にも なりぬ  
れば 露より霜を 結びおきて 野山のけしき ことなれば  
(以下略)

『大納言経信集』では、同歌の詞書に「初冬述懐、永保二年十月日刑部卿政長八条会」とある。政長が、永保二年(一〇八二)十月に、人々を集めて八条亭で和歌会を催しているのであり、経信以外には俊頼や大江匡房も参会しているようである。長歌の会であるのが注目されるが、政長は会場を提供しただけで、實際上の企画者は経信ではなからうか。和歌にそれほど熱意を持っていない政長が、

ところで政長は、承暦二年(二〇七八)四月二十八日の「承暦内

風変りな長歌の会を企図するとは考えにくいし、しかも経信は、受領層の貴族や僧侶のもつて、たびたび和歌会の開催を首唱している形跡がある。

土左守頼仲が長岡といふ所に、夜とまりて、山家冬夜  
山里は夜床さえつつ明けぬらしとかたぞ鐘の声きこゆなり

(『大納言経信集』)

頼仲が長岡の家に故帥殿おはしまして、一夜とどまらせ給ひて、山家冬夜といへる事をよませ給ひけるに、よめる  
ひとりぬる宿はふぶきに埋もれて岩のかけ道跡たえにけり

(『散木奇歌集』第四)

経信と俊頼の家集から、同一和歌会での詠と思われるものを引用したが、『散木奇歌集』の方が一般的に、自撰のせいもあるが、詠歌の状況を詳細に記している。源頼仲の長岡山荘での会であるにもかかわらず、経信が詠み、俊頼がそれに和したとする詞書の表現から、首唱者は、故帥殿すなわち経信であったと推定される。

あまの川といふ所にて、かはらけとりて  
またも来む秋とちぎればあまの川われ七夕に劣らざりけり

(『大納言経信集』)

河内守経国、かの国におもしろき所ありと申しければ、帥殿忍びておはしけるに、あまの河といふ所にて、在中将の七夕つめにとよめる所なりとて、舟とどめて河のほとりにおりてあそばせ給ひけるに、かはらけ取りて、おのおの歌よませ給ひけるに、よめる